

## 第 20 回一関市総合教育会議 会議録

1 会議名 第 20 回一関市総合教育会議

2 開催日時 令和 6 年 12 月 18 日（水） 午後 2 時から午後 3 時 30 分まで

3 開催場所 一関保健センター 栄養指導室

4 出席者

(1) 構成員

佐藤善仁市長、時枝直樹教育長、伊藤一志教育委員、佐藤一伯教育委員、  
桂島加奈子教育委員、大浪友子教育委員

(2) 事務局等

市長公室長、市長公室次長兼政策企画課長、政策企画課課長補佐兼政策推進係長、  
政策企画課主任主査

教育次長兼教育総務課長、副参事兼学校教育課長、  
副参事兼文化財課長兼骨寺荘園室長、博物館次長、いきがいつくり課長、  
一関図書館副館長、教育総務課課長補佐兼庶務係長

5 議 題

キャリア教育について

6 公開、非公開の別 公開

7 傍聴者の数 報道 2 社

8 市長挨拶

第 20 回目の総合教育会議である。

総合教育会議は、平成 27 年に制度化されており、市長が招集し、教育長、教育委員と市の教育について協議を行うものとなっている。メンバーの入れ替えなどを踏まえ、総論から始めて各論を行う流れで、私が参加した初回である第 14 回が「これからの一関市の教育行政について」というテーマ、時枝教育長が就任した初回である第 18 回は「これからの教育に求められるもの」というテーマ、今年度は第 19 回に「特別支援教育」、第 20 回に「キャリア教育」というテーマとした。

キャリア教育は、これまでは第 16 回に「地域と学校との連携」をテーマにした際に例示として挙げられており、大きく取り上げたのは今回が初めてである。

キャリア教育とはどういったものかという認識は、私自身定まっていない。だが、現在の人口減少社会の中ではこのテーマはおそらく大本命の議題となると考えているため、本日はよろしく願いたい。

9 懇 談

教育長 本日のテーマは、学校教育の重点項目としているキャリア教育である。まもなく冬休みを迎えるが、3学期には小・中学校ともキャリア教育の指導が展開される。こどもたちの人材育成は、市全体の人材育成とも重なってくると思われるため、よろしくお願ひしたい。

- 事務局（副参事兼学校教育課長）から、資料No.1 について説明
- 教育長から、資料No.2 について説明

教育長 話題提供として、キャリア教育とはという大きい視点からの話であった。キャリア教育そのものについて、委員の皆様から意見をいただきたい。

伊藤委員 教員としてキャリア教育を推進したときのことを踏まえて発言する。キャリア教育については、生き方の指導というように捉えて対応してきた。核家族化に伴って、こどもが家族の一員として家庭で担う役割がなくなったり、家庭でも会話が續かず部屋に閉じこもってしまったりという課題が、中学生の実態から見えている。私たちの小さい頃は食事の後片付けをしてから学校に行くなど、家族の一員として何かしら役割があり、働くことの尊さや勤労とは何かを身をもって知っていた。そういったものが今はほとんどない状況であり、課題と感じている。

また、経済観念が薄くお金に対する価値観が麻痺し、お金の尊さを理解していないこどもも多い。親へのお金の無心や、祖父母とのコミュニケーションのツールがお金になっているという現状がある。将来の生活設計や自分の生き方などを真剣に考えることが少なく、本気になって自分と向き合っておらず、故に、将来の進路や職業を思い描けていない傾向がある。

一関市の教育の目標は、市長、教育長が話されたようにひとつづくりに重点を置き、小・中学校では、キャリア教育を段階的、計画的に進めている。しかし、自己に向き合い自分自身を知ることがなく、将来を見据えた職業観が十分に抱けておらず、自己肯定感や自己有用感が持てない、自己分析できないでいるこどもが多いことは、学校にとって大きな課題である。

教師も、キャリア教育を推進する上で、これまでは額に汗して働くことのみを労働と捉えた指導が多かったが、現在はデジタル化が進みAIを使った仕事などもあり、キャリア教育を進化させる必要もある。キャリア教育は将来につながる生き方の教育であるので、教育全体を通して、本腰を入れて指導する必要がある。

大浪委員 母として自分のこどもに対し、将来きちんと働けるか不安に思うことがある。職業人としては、働く人がいないと企業が成り立たないことから、今後どうして

いくべきかという問題にも携わっている。こういった中で、中学生のキャリア教育が5日間の社会体験学習を終えたという達成感に留まってしまっているのではと感じることがある。キャリア教育とは何たるかをしっかり理解した上で受け入れている企業が、どれだけあるか疑問である。一関市の教育の重点であるひとつづくりのための5日間の意味を、企業側にもしっかり理解いただいた上での受入れとなるよう進めるべきである。

教育委員としての活動の中で、子どもたちはしっかり考え、議論することができるようになっていることを知った。子どもたちも、興味を持てる企業を時間をかけてしっかり探し、この企業について研究し、実際の職場体験につなげる組立てにしてはどうかと考える。

企業側は、高齢者雇用、障がい者雇用なども行っていることから、中学生の5日間の受入れが難しくなっている現状もあり、5日間という期間の見直しも必要ではと感じている。

桂島委員 5日間の社会体験学習について、生徒は期待と不安を抱いて体験に臨み、5日間やり切って達成感を持つ。この達成感は人生において必要なものであり、生徒の自信につながるものである。社会体験学習は企業の理解と協力があってこそできるものであり、体験を終えた直後に振り返りとして受入れへの感謝などをまとめ企業に提出しているが、例えば二十歳のつどいなどの機会にキャリア教育の振り返りを行ってはどうか。年齢を重ねることでその時の体験の意味が深まり、将来的に地元で働くきっかけとなり、ひいては一関市の人口増にもつながるのではないかと思う。

佐藤委員 キャリア教育については、先ほど市長から、人口減少社会においては大本命の課題であるとの話があり、教育長からも、学校教育活動全体を通じて実施すべきものであるとの説明があった。キャリア教育については職場体験と考えがちだが、日常の学校教育や家庭教育も含め、全体の中から学ぶことも多い。通学し挨拶を交わす、教室で授業を聞く、先生が話し生徒が答えるというキャッチボールの展開、人の発言をきちんと理解すること、発言時の声の大きさに配慮すること、その全てが社会的な行為である。

小規模小学校などで行われる学年を超えた縦割り班清掃の取組や中学校の委員会活動などもキャリア教育の仕組みである。単なる職場体験に留めず、家庭教育、学校教育、地域全体といった全ての中に学びの場があると考えていくべきと感じた。

教育長 学校教育の中で国語や算数、社会などはイメージが容易にできるが、キャリア

教育は、言葉の概念は何となく分かるものの具体的なものがないため、曖昧に受け止められている。5日間の社会体験学習がキャリアの学習の取組であることへの理解は容易だが、社会的・職業的自立に向けては、異年齢の学年の関わりや授業中に相手の話をよく聞くというのもキャリア教育である。各学校、各教科で、キャリア教育となる部分を洗い出し、可視化していくことが課題である。

市長 資料No.1に、「各発達段階に合わせて、地域に根差したキャリア教育に取り組み、児童生徒の社会人基礎力を育てます」とある。また、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す」とあることから、キャリアとは「社会人基礎力」に置き換えられる。社会人基礎力とは何かを読み解くと、社会的・職業的自立や能力、態度という言葉につながっていく。そして、資料No.2の「職業を通じて未来の社会を作り上げていく視点」という部分が、キャリア教育とは何かという核心と感じた。

先日、教育長に、キャリア教育という言葉が言われ始めた経緯を聞いた。1999年の中央教育審議会の提唱をきっかけに、学校現場で本格的に導入されたということである。その頃は、いわゆるバブル経済が崩壊した後の就職氷河期の時代であり、日本の人口構造では第2次ベビーブームの世代が就職する時代だった。引きこもりが社会問題となったことなどを背景にキャリア教育というものが国で検討され、反省に基づいた必要性があった。まさに、職業を通じて未来の社会を作り上げていくということであり、個々の力を高め、社会の力を高めていくということである。

海外の人たちから状況を聞くと、ベトナムや台湾では、社会として子どもを育てていく視点がある。国が経済的に発展してしまうと、社会で子どもを育てるといった視点が薄くなり、個々の視点が強くなる傾向があると感じる。

教育長 職業を通じて未来の社会を作り上げていくという視点は、教育委員会としても重要であり、ここまでで共通理解を図ることができた。

○ 事務局から、資料No.3、No.4について説明。動画視聴。

教育長 小学校と中学校の具体的な指導の事例を紹介した。小・中学校の指導のあり方という視点でご意見をいただきたい。

伊藤委員 中学校2年生の社会体験学習を見たが、中学校3年生でも類似の取組として修学旅行がある。修学旅行の行き先で働いている地元出身の人を訪問し、職業観を学ぼうという取組である。

こどもたちにとっては、2年生の社会体験学習は非常に大きく受け止められていると感じている。今のこどもたちは、デジタル機器で職業や進路などの情報も簡単に入手でき、それ故か将来のことを安易に捉えていて、簡単に決められる、何とかなるだろうと高をくくる傾向にある。だが、いざ直面してみると迷いが出て、自分のやりたいことも進みたい方向も決められないでいる。こういう状態のこどもたちが、社会体験学習で事前に学習し、実践で仕事に向き合い、家族以外の大人と会話し、一生懸命働いている大人と接することで、顔色が変わり物事に真剣に取り組むようになる。生徒の変容ぶりは親も驚くほどであり、家庭内での会話や進路の相談をするようになったという話も多く聞かれた。社会体験学習で働くということを学んだ結果、将来の生活に希望を持ち、学校生活も活力あるものになったことから、キャリア教育の中の社会体験学習というのは非常に重要と感じている。

大浪委員 事例発表の株式会社オヤマについての学習は、こどもたちも楽しそうで印象的であり、企業としても非常に羨ましく感じた。毎日社内で同じメンバーで働いていると気付きが少なくなっていくが、こういった機会があるとこどもたちから様々なことを教えられ、企業としても新しい一歩につながるものである。

教育委員の研修の中で、こどもハローワークという取組を紹介されたことがある。こどもと社会、地域、未来をつなぐハブ機能としての取組であり、例えばこどもの週末や長期休みの過ごし方についてハローワークの掲示板に企業や団体がイベント情報を掲示し、ボランティアを募集する。こどもはこれを見て、興味のあるイベントや地域の行事などに参加するもの。地域では伝統的な祭りや芸能などの取組に関し担い手が不足しているという話が聞かれており、興味をつなぐことで地域愛の醸成にもつながる。もちフェスティバルやTGCなどのファッションイベントなどの市内のイベントに、中学生や高校生など年齢層が混じった形で、趣旨を伝えながらボランティア活動を促し、取り入れていくと、キャリア教育としても面白いものになっていくのではと思う。

教育長 小学校と企業との連携した事業は今後も進めていきたいものであり、キャリア教育の中で地元を理解するということが大きい。地域行事や伝統活動などのボランティアは実際に取り組んでいるこどもも多く、これの価値づけをどうしていくか、キャリア教育にどう位置付けていくかは今後の課題と捉えている。

桂島委員 キャリア教育という視点では、こどもたちに最も身近な職業である小・中学校の先生方は、こどもたちの前で働いている経験や体験をどの程度話しているか。キャリア教育として特別なことをやるだけではなく、日常の中で保護者や身近な

大人が働くということを伝えていくのは非常に重要である。例えば家庭で仕事が大変とか疲れたとかばかりを言っていると、こどもは仕事とは大変で疲れるものだとして認識してしまう。大変であっても続けていることには意味があるはずであり、例えば目的が収入を得ることだとしても多くある仕事の中でこの仕事を選んだ理由はあると思われ、こどもに話すことは家庭の中でのキャリア教育であり、重要である。

教育長 小・中学校の担任の先生は、なぜこの仕事が好きなのかなどをこどもたちに話しているか、中学校で指導経験のある学校教育課長はどうか。

学校教育課長 話している。

佐藤委員 株式会社オヤマの授業、社会体験学習の映像で、こどもたちがいきいきと学んでいる様子を見て、受入れをしている企業や地域の活力にもなっていると感じた。社会とのつながりによる様々な効果は、社会体験学習に関わった生徒と企業の双方にある。意見の中で5日間の体験で終わってしまうことへの危惧が挙げられたが、キャリアシンポジウムなどの機会での振り返りや企業に対する御礼状の送付を行っている。中学生の社会とのつながりという意味での取組の意義は大きいものであるが、企業側にとっても重要であり、生徒の気持ちは御礼状という形で企業に伝わり、企業でもこのつながりを大切にしていけることで地元就職するきっかけにもなりうるため、持続的なつながりを意識していければよいと考える。

また、社会体験学習の職種について、農業関係の事業所もあるようだが、受入農家の負担が大きいという話を聞くほか、病院など個人情報との関係で受入れが難しい事業所もあると聞く。職種の偏りがないようにする配慮や様々な受入れの形を模索することで、負担感が少ない方法、配慮が必要な事業所でも受入れができる方法を考えていければよいと思う。

教育長 社会体験学習について、指導要領に具現化された平成13年度のあたりは5日間取り組む学校が多かったが、企業の受入れの負担感や学校現場の状況などから、県内では現在、2、3日とする学校が圧倒的に多い。重要な部分である4日目、5日目の主体的に考え、動き働くという部分にしっかり取り組まないと、この取組の本質的な部分が成り立たない。ただし、大変なのは本当であり、実行委員会に多くの組織に入ってもらい、企業等にもご理解いただけてきている状況である。

市長 佐藤委員からお話があった農業について、市では、農家の後継ぎだから、農地があるから農業を選ぶのではなく、農業に就職するという状況を目指している。イベントの話もあったが、例えばTGCteenは貴重な体験の機会であり、普段

立ち入ることのできない現場でケータリングやメイクの手伝いなどをする。

キャリア教育が未来の社会を作り上げていくという視点では、固定的な職業観のようなものもなくしていく必要がある。

さらに、未来の社会を作り上げる人を育てるという意味では、一関市の未来だけを見てよいのかということもある。私は市内の高校で、一関市と仙台や東京などで暮らした場合の経済的な比較、子育て面などの生活の違いを、高校生に対し話している。その話においては、一関市に残ってくださいとは言わない。一関市の高校生は、高校を卒業すると8割がた市外に転出してしまう現状であり、市長の立場では残ってほしいところだが、高校生にはどこに行ってもよい、好きなどころで色々なことを勉強し、経験してほしいと言っている。だが、こどもができる段階、子育てをする段階になり、子育てに主眼を置くようになった時は、一関市に戻ってくるのが子育て環境が整っておりプラスになるという話をしている。5日間の職場体験などの核となる部分であり、そこは間違えてはいけない部分であると考えている。

本日の話は、総論的な話から始まり、後半では一関市に置き換えたときにどうすればよいかという視点の話であった。キャリア教育というものが日本に必要なになってきた背景には、大きな自己反省があった。本日の議論の中で感じたことは、職業観や社会人観というものを、教える我々の側がきちんと持たなくてはならないということ。そして、教える我々が描く未来の社会は、社会そのものなのか一関市の未来なのか、又はその両方なのかということである。キャリア教育を進める上で地元をきちんと知ってもらうことが必要だが、一関市は地元学とはこれというものがないため、きちんと形づくることも必要と捉えており、こどもの年齢に合わせて地元学というものをきちんと伝え、この土台がある上で職業観や社会に触れる機会を設けることで、未来の社会、一関の将来の両方を考えていけるのではないかと思った。

さらにその上で、我々大人が、キャリア教育に耐えられるような大人の社会を作っていくことが一番大切である。こどもたちの問いにきちんと答えられるような大人の社会を作ることに、市長部局、教育委員会で一緒に取り組んでいかなければならない。

教育長 教育委員会としては、これからの職業観とはいつを見据えたものとするか、未来の社会とは何を指すものか、そして一関の将来とこどもたちに何を学ばせるかという部分をしっかり具現化していく必要があると感じたところであり、これをキャリア教育につなげていく部分は、全体の課題とも感じた。これから考えてい

きたい。

10 担当課

市長公室政策企画課